

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・安心して子育てに臨めるよう、妊娠期から拠点を活用していただくために、産婦人科医療機関等と連携をした拠点の周知活動や、母子コーディネーターと課題共有・連携することで、参加しやすいイベント開催に向けた取り組みが必要である。 ・様々な方が利用しやすいよう、提示物の工夫や遊具等の配置に気を付けた環境づくり、アウトリーチ活動も含めた居場所提供により一層取り組んでいく必要がある。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	A
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		A	A
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

H31年度乳幼児健診アンケート(区実施)

・はっちではほっとしたり安心して過ごせますか? そう思う 54% そう思わない 5% どちらともいえない 41%

R3年度はっち利用者アンケート(拠点実施)

・親子で楽しく過ごせている 98%
・コロナ感染予防対策に関して 安心して利用できる 96%

R5年度乳幼児健診アンケート(区実施)

・拠点を知った時期はいつか 妊娠期までに知った 68% 産後知った 31%
・利用者を温かく迎える雰囲気があるか そう思う 94% どちらともいえない 3.8%

拠点利用実績(受付システム)

	利用組数(組)		利用人数 (人/年)	利用者 親等 内訳(人/年)							新規登録者数 総数
	年間	1日平均		父	母	祖父	祖母	プレパパ	プレママ	その他	
R1年度	9,268	42.9	19,251	530	8,332	4	98	64	96	225	704
R2年度	8,416	41.8	17,218	699	7,390	0	46	67	101	116	543
R3年度	10,892	45.4	22,470	1,037	9,348	6	78	118	146	159	727
R4年度	12,127	50.1	24,369	1,325	10,034	11	98	154	187	318	851
R5年度	12,897	53.3	25,302	1,759	10,088	30	138	180	247	455	934

1.コロナ禍でも安心して利用できる居場所の感染対策と運営の工夫

- ・感染防止対策の徹底を実施しながら、利用者とのふれあひもなくなさないよう運営を行った。(職員のマスク着用・手指消毒・前向き抱っこ)
- ・感染への緊張が続く中、壁面装飾や音楽など視覚・聴覚を通じて親子の笑顔を引き出す工夫をした。
- ・会議のない時は2階研修室を工作や身体を使った遊び場として開放し、安全かつ受入組数を下げない環境設定とした。
- ・ZOOMによるおしゃべり会や、希望者の多い講座にはオンラインを利用し、自宅からでも参加可能な運営を行った。

2.妊娠期からの切れ目ない子育て支援

- ・区の両親教室での周知や母子保健コーディネーターとの連携、拠点での沐浴体験・プチ体験講座開催により、妊娠期家庭の来館機会が増えた。
- ・区の赤ちゃん教室や4か月健診で周知した「あかちゃんのへや」(0歳児専用・予約不要)は遠方からも利用があり好評だった。
- ・0歳児家庭は育休中の父親が赤ちゃんと2人で来館され、産後の母親の休息時間が確保された。

3.多様な世代や養育家庭が訪れる場となる工夫

- ・外国籍の家庭の困りごとに対応できるよう関係機関との協力も得ながら情報をつなげ、入園等のサポートも行った。
- ・多胎児の集まり「ツインスターズ」では職員の子どもの見守りのもと保護者同士が話せる時間を設け、仲間づくりが深まった。
- ・発達に心配のある家庭の「なないろ」では、公認心理師が同席する日も設け、適切な相談の場としても環境を整えた。
- ・毎月第2土曜日をパパdayとしてイベントを企画、通常でも父子が楽しく利用できるよう工夫をしたことで父親利用数が増大した。
- ・日曜開館を年間4回実施、日曜しか休みのない家庭や保育園利用の家庭が拠点を利用できるよう工夫をした。
- ・「はっちボランティア」(大学生~70歳代まで登録40名)が、ひろばの見守り・装飾製作・背守り刺繍・ウッドデッキ塗り・公園遊びの見守りなど、自分の希望する活動に参加してくれたことで多世代交流が生まれ、子育て家庭が地域の知り合いを増やすこともできた。

4.アウトリーチによる遠方の利用者への支援

- ・区内のケアプラザ9か所と公園12カ所へ外向き、拠点の機能を幅広く周知し必要な時に拠点を利用してもらうことができた。
- ・公園あそびでは主任児童委員や子育てサークルに事前周知して、地域の多世代の交流が生まれるよう工夫をした。

5.親育ち・子どもが健やかに育つ居場所

- ・様々な特性の子どもが楽しく学び遊べる工夫(トランポリン・昆虫飼育・野菜栽培)を行った。
- ・保護者が童心にかかって子どもと遊び込める環境(プラレール・工作コーナー)や企画を考え実施した。
- ・子ども同士のトラブルには、子ども双方の気持ちを保護者が受容することが成長過程に大切であることを伝えた。

評価の理由(区)

- ・医療機関を訪問して、プレパパ・プレママをはじめとした拠点が行う事業や拠点の役割の周知に努めた。
- ・区内の多職種と協力しながらアウトリーチの方法を一緒に工夫し、関係機関にも拠点の動きを周知することができた。
- ・多様な養育者の支援についても区の会議や関係機関に対して周知した。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・コロナ禍には感染対策を徹底しながら安心して過ごせるよう予約制にはせず譲り合って利用してもらう方法を取ったことと、年齢月齢に応じた遊びやすい環境設定を考え、多くの人が利用でき、親子共にほっとできるひろば運営ができた。

・妊娠期の切れ目ない支援の取り組みについて区と拠点と役割分担をしながら事業展開をした結果、出産前から拠点を訪れ、出産後スムーズに拠点利用に繋げることができた。

(課題)

・コロナ禍で困難だったが改めて養育者同士が仲間になれるようきっかけをつくり、課題解決をする仕組みづくりに取り組んでいく必要がある。

・今まで以上に多様な養育者の新たなニーズや課題を受け、養育者に合った拠点利用につなげていく必要がある。

振り返りの視点

ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。

イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。

ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。

エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。

オ 把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。

カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。

キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。

ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフ定例会等で相談内容について検討や研修や勉強会等を通してスタッフ同士が学び合いの日々の対応をより良いものにしていくことが必要。 ・区に対して緊急で相談が必要な案件の判断が、施設長がいなくてもでき、施設長以外でも区に相談できる仕組みを作っていくことが必要。 	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

子育ての相談をしやすい雰囲気ですか(区乳幼児健診アンケート)		
H30年度	そう思う 61%	そう思わない 3%
R5年度	そう思う 84%	そう思わない 1%

	スタッフ相談			赤ちゃん相談件数	公認心理師相談件数	保育・教育コンサルジュ相談件数
	相談人数	相談件数	相談の多い項目			
R1年度	726	915	子どもの生活:30% 就園・就学:17% 子どもの健康:14%	44		69
R2年度	1,431	1,661	子どもの生活:30% 就園・就学:17% 親自身:14%	32		31
R3年度	1,904	2,102	子どもの生活:30% 就園・就学:17% 親自身:14%	39	45	47
R4年度	2,030	2,288	子どもの生活:31% 就園・就学:15% 親自身:13%	44	45	47
R5年度	2,094	2,354	子どもの生活:35% 就園・就学:14% 親自身:11%	34	27	45

1 相談しやすい場の工夫をする

- ・広場でスタッフが利用者との日常会話から子育て中の困り事を聞くなど相談しやすい雰囲気作りに努めた。
- ・相談を受けたスタッフは話を傾聴し相談者に寄り添う対応を心がけた。
- ・ゆっくり安心して相談ができるよう必要な場合は、相談室を案内したり、他のスタッフが子の見守りなど配慮した。相談内容によっては子育てパートナーに繋ぎスタッフ間の連携を整えた。
- ・父親の来館が増え継続利用者も多く、スタッフと気軽に話しが出来るようになった事で父親が持つ悩みを知り相談に繋がる機会が増えた。
- ・子育て相談の中では同じ内容で悩んでいる利用者同士が話せるようスタッフが繋ぎ、悩みの解消に至ることができた。
- ・発達の遅れなど継続して支援が必要な相談については、相談内容や親子の様子をひろば連絡票に記録しスタッフ間で共有しながら適切な対応ができるよう連携した。

2 スタッフ研修により全員が知識を持ち多様な相談に対応できるようスキルアップを図る

- ・毎月の区との定例会で区の事業や相談対応方法を共有するとともに、子どもの権利擁護担当より虐待についての研修を受けスタッフ全員で知識を得た。
- ・多様な養育者の相談に対応できるよう精神保健福祉研修(基礎医学編)の研修にオンラインで参加しスタッフ定例会で全員に共有した。
- ・子育て支援者の研修会に拠点スタッフが参加し相談の多い離乳食の知識を栄養士から学んだ。
- ・拠点で実施した入園に関する講座の内容を定例会でスタッフにも共有し相談対応に活用した。

3 専門相談ができる場を設けるとともにスタッフの知識向上に繋げる

- ・助産師、公認心理師、保育・教育コンサルジュに相談できる日を設け専門的な相談ができる場を提供し終了後には相談内容を共有して対応の振り返りを行いスタッフのスキルアップを図った。
- ・相談の多い内容(おむつはずれ、イヤイヤ期、子どもの生活、卒乳)については、保育士、助産師の講座を実施して多くの利用者の悩みにスタッフが対応できるよう工夫をした。

4 区と連携して役割分担をしながら継続した対応を実施

- ・毎月の区との定例会で継続支援の必要な親子の対応方法を情報共有し適切な支援が行えるよう確認をした。
- ・虐待が心配される家庭の相談を受けた場合は、子育てパートナーに繋ぎ、緊急を要する場合は当日中に区へ情報提供を行った。

評価の理由(区)

- ・定例会などでひろば相談の様子や相談内容について共有、振り返りを行い、必要時助言を行った。
- ・相談体制について養育者が相談しやすいか等の状況を確認を定例会などで行い、ひろばスタッフのスキルアップや体制づくりに向けて拠点と検討した。
- ・スタッフが安心して相談を受けることが出来るようにスタッフ定例会の機会を活用し、研修会を行った。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・拠点の広場でスタッフが利用者の相談に丁寧に対応していく心がけができています。
- ・専門職相談日を設定している事で、必要に応じて利用者を専門相談につなぎやすい体制を整えた。
- ・アンケートデータ上も相談をしやすい雰囲気という数値が上がっている。

(課題)

- ・多様な養育者からの様々な相談に経験が浅いスタッフが対応できるようスキルアップを行っていくと共に、スタッフ同士の学び合いも継続していく。

振り返りの視点

- ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。
- ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。
- エ 各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。
- オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。
- カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・子育て情報を広くタイムリーに届けられるよう、区と拠点の持っている情報を結び付ける工夫が必要。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。	・地域の子育て情報が拠点に集約されるよう、子育てで支援関係者間での「地域子育てカレンダー」の共有化を図る。	A	A
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。	・より受け手に届きやすい情報発信ツールについて、引き続き検討を進めていく必要がある。 ・拠点の居場所以外の機能を知ってもらえるよう、更なる周知方法の検討が必要である。	B	A

評価の理由(法人)

《主なデータ》

【はっちからのラブレター送付先】港南区内ひろば・サロン、地域ケアプラザ、地区センター、コミュニティハウス、図書館、小児科、産婦人科、保育園、幼稚園、南部病院、横浜医療福祉センター港南 アンパンマンこどもミュージアム 計186カ所

SNS 発信 (Instagram)

開始	フォロワー
R4年2月開始	
R4年3月	107
R4年10月	349
R5年10月	768
R6年3月	911

はっちで得たい情報(拠点アンケート)

	1位	2位	3位
R4年度	はっちイベント	区内施設イベント	近隣のお出かけ
R5年度	はっちイベント	近隣のお出かけ	区内施設イベント

子育てに関する情報は得られやすいですか(区実施)

H30年度	そう思う 70%
R5年度	そう思う 78%

子育てLINEサービスwith港南アンケート(区実施)

項目	第1回調査	第2回調査
配信情報が役に立ったと感じた割合	70.0%	73.0%
配信されたイベントに参加した割合	54.8%	70.2%

1. 子育て情報の集約と提供

- ・情報コーナーはカテゴリ別に配置し利用者が必要な情報を取りやすいように整理し、スタッフが連携して利用者に適した情報を提供した。
- ・掲示物以外で知りたい情報があれば、スタッフがタブレットですぐ検索して情報提供した。
- ・港南区子育て連絡会で周知する事で各施設が希望する情報を認知し「地域子育てカレンダー」掲載に活かす事ができた。

2. 区との協働でより届きやすい情報発信ツールを開拓

- ・子育て世代が最も利用するInstagramで拠点の様子や子育て支援関係者の活動なども発信し幅広い周知をした。
- ・地域の子育て支援関係者からの情報を集約し、区が運営する「子育てLINEサービスwith港南」の発信に拠点が協力した。
- ・より届きやすい情報発信のために区とともに「ひまわりまっぷ」電子化についてのwebアンケートを実施、また拠点を会場に利用者のヒアリングを実施した。R5年12月に「港南区子育てサイトこなび」が完成しWEB版の情報発信がスタートした。
- ・法人発行の「港南区保育・教育施設特集」の冊子を拠点と区・つどいの広場と連携して入園を検討される家庭に配布した。

3. 拠点の居場所以外の機能の周知

- ・アウトリーチ活動や4ヶ月健診(月2回)、両親教室、ひろば、ケアプラザなどにスタッフだけでなく、子育てパートナー、子サポのコーディネーターが出向いて居場所以外の拠点の機能について周知を行った。来館時には顔見知りのスタッフがいる安心感も感じてもらった。
- ・イトーヨーカドー(上永谷・別所)に直接交渉して赤ちゃん休憩室の拠点情報コーナーを設置し定期的に情報更新をした。
- ・広報よこはま港南区版に毎月拠点のイベントや子サポ入会説明会など掲載した。
- ・地域の自治会関係者の会議に参加して拠点の7つの機能について周知した。

4. 拠点の情報発信の養育者や担い手の関わり

- ・子育て家庭に地域の子育てを応援する人のネットワークを知ってもらうため、港南区子育て連絡会の年間活動を継続的に拠点のホームページから発信した。
- ・子育てサークルの活動紹介やメンバー募集のチラシを拠点のひろば内に掲示し周知の協力をした。
- ・区の補助を受け区民講座を開催するボランティア団体の周知に拠点が協力、今後の運営についても相談に応じた。

評価の理由(区)

- ・区の事業や家庭訪問を通し拠点のホームページやインスタグラム等を紹介し、拠点が情報集約の場であることを周知を行った。
- ・「港南区子育てサイトこなび」を立ち上げるにあたって拠点と協力して養育者からの声を聞き、サイトの内容に反映させた。
- ・「子育てLINEサービスwith港南」を通じて、養育者に広くタイムリーに情報提供ができた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・子育て支援関係者からの情報を集約し、区が運営している「子育てLINEサービスwith港南」の発信に拠点が協力する事で、遠方や交通手段が難しく、なかなか拠点に来館できない家庭にも、地域の子育て情報が届くようになるとともに、各関係機関・団体に拠点が情報集約・発信機関であることが認識された。
- ・はっちInstagramでは、子育て支援関係者の活動の紹介や、はっちの様子を発信し、タイムリーで幅広い周知ができた。

(課題)

- ・養育者からの意見ももらい、情報収集や発信を協力して実施できるよう検討する。
- ・新たな情報発信方法の整理を行っていく必要がある。(横浜市子育て応援サイト(パマトコ)、港南区子育てサイトここなび、Instagram等)

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	・子育てひろば、サロンを運営する方々の交流会の開催にあたり、内容についての検討が必要である。 ・「遊びにおいてよこどもフェスティバル春・秋・冬」がなくなり保育園と連携する場が減ったため、別の方法で連携をとる工夫が必要である。	A	B
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。	・「子育て連絡会」に参加するメンバーが、子育て連絡会の活動目的を共有しながら、より主体的に必要な取り組みについて意見交換できるように支援していく必要がある。 ・エリア別の「子育て連絡会」を通して、より身近な地域でのネットワークづくりの充実を図っていく必要がある。	A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

H30年度港南区子育て連絡会 会員50団体 賛助会員19団体

R5年度 港南区子育て連絡会活動実績 (会員53団体 賛助会員30団体)		
全体会	区役所 (3回)	参加者のべ 178名
推進委員会	拠点 (6回)	参加者のべ 120名
エリア会議	区内ケアプラザ4施設(4回)	参加者のべ 77名
子育て講演会(虐待防止)	港南公会堂	参加者 113名
講演会班	拠点 (6回)	参加者のべ 76名
ニュースレター班	拠点 (12回)	参加者のべ 77名
情報班	拠点 (4回)	参加者のべ 32名
活動実績	合計 36回	合計 参加者のべ 673人

地域ネットワーク会議(開催および参加)	
つどい・居場所定例会 開催	年3回
ひろば・サロン交流会 開催	年1回
子育て連絡会研修会 共催	年1回
港南区施設ネットワーク会議	年2回
主任児童委員定例会	年1回
こんには赤ちゃん訪問事業定例会	年1回
ケアプラザコーディネーター会議	年1回
港南台子育て連絡会	年12回
下永谷地区社協定例会	年1回
港南区要保護児童連絡協議会	年3回
港南区オレソジ会議	年4回
3館合同まつり実行委員会	年5回
港南区中学校校長会	年2回
港南区小学校校長会	年1回
ひまわりフェスタ会議	年2回
子育て支援者定例会	年1回

1 港南区子育て連絡会を中心とした地域のネットワーク構築のための活動

・港南区子育て連絡会の事務局的角色を拠点が担い連絡会に所属される団体との細やかな連絡調整や、コロナ禍には活動が滞らないよう、会員がオンラインを活用できるように調整し、各会議や研修会・講演会等の運営を援助した。
 ・港南区子育て連絡会では区内を4エリアに分け、地域の課題抽出とネットワークの強化を目的にエリア別会議を実施した。拠点は全ての地区に参加し、参加者のとりまとめや議事録の収集を行い、その後の全体会で会員同士がスムーズな情報共有が出来るよう後方支援を行った。
 ・ひろば・サロン交流会を実施し、つどいの広場・ケアプラザ職員・主任児童委員など、地域の担い手が抱える活動に関する課題を参加者で話し合い解消する場となった。
 ・子育て当事者が立ち上げた地域活動団体に港南区子育て連絡会を紹介することや、地域の子育てを応援してもらうための賛助会員を誘致して新たな会員を増やした。
 ・居場所事業が終了するにあたり、その地区の子育て支援が不足することがないよう区・保育園・ケアプラザと今後の支援策について意見交換を行い目指す方向が明確になった。
 ・港南台子育て連絡会の活動に年間通じて参加した結果、多くの保育園やボランティア団体と顔の見える関係ができ、拠点の情報発信機能を活用してもらうことで拠点のノウハウを地域に提供できた。

2 アウトリーチの機会を活用して、より多くのネットワーク構築を図る工夫

・出張はちでは区内9館のケアプラザの会場を借りて地域の親子を誘致するが、事前に子育て支援者や主任児童委員などその地域の子育て支援関係者にも声をかけ、事業に参加してもらう取り組みを行った。
 ・公園あそびでは、子育て支援者だけでなく近隣の子育てサークルにも声をかけ参加した子育て家庭にサークルの活動を紹介仲間づくりに繋げた。

3 地域の課題を解決するために、ネットワークを利用して子育て資源を復活

・公園の数が少ない地域の「子どものあそび場」が閉鎖となり、地域から外遊びの場を減らしたくないという相談があり、区地域振興課と拠点で協議、保育園・NPO団体と協力して運営団体を立ち上げ、保育園と地域の子育て家庭が遊べる公園に復活させた。

4. 子育て支援ニーズを踏まえ、様々な社会資源と連携・協力

・外で遊びたいとの保護者からの要望を踏まえ、田野中央公園と連携して公園の花壇にチューリップ300本の球根をみんなと植えた。咲いた後は継続して外遊びができる場をつくった。また子育て家庭だけでなく近隣の住民にも鑑賞してもらえた。
 ・日本語の理解が難しい外国籍家庭に対し、国際交流ラウンジと連携し必要な支援を行った。
 ・商業施設に協力してもらい赤ちゃん休憩室内に情報コーナーを設置して新たなネットワークを構築した。

評価の理由(区)

- ・拠点・区定例会の場でネットワークの視点をもった事業の振り返りができるよう努めた。
- ・エリア会議の前に区と拠点で課題共有をすることで、会議当日に円滑かつ効果的なグループ討議ができ、地域連携が深まった。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・顔の見える関係が構築されて港南区子育て連絡会の所属団体数が過去最高となり、情報の共有・発信がスムーズに行われた。
- ・港南区子育て連絡会では地域のエリア別に分かれて会議を行い、地域の課題を関係機関とより細やかに把握することができた。
- ・地域の支援者に拠点事業や子育ての現状を説明する機会を得て、子育て支援の必要性や地域の支え合いを理解してもらえるよう区とともにアプローチができた。
- ・コロナ禍に直面した関係機関や団体の運営課題に関して、拠点が感染予防対策やオンラインの活用方法など助言や手伝いを行い、課題の解決に繋がったとともにさらにネットワークを深めることもできた。
- ・出張はっちや公園遊びを通して拠点とともに拠点利用者を地域につなぐことができた。

(課題)

- ・新たな区内の子育て支援団体(カフェ、こども食堂など)の情報を早く入手し、活動に関する援助や関係機関との橋渡しを行えるよう、より広いネットワークの構築とネットワークの良い活動を持続させる必要がある。
- ・拠点と区で子育て家庭や子育て支援関係者の状況やニーズを丁寧に把握し、養育者の実態と港南区子育て連絡会の活動内容がより一層連動できるよう支援していく。

振り返りの視点

- ア 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。
- イ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。
- ウ 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。
- エ 養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	・子育てグループの育成や支援の充実を図ることで、養育者が主体的に地域で繋がりがながら、子育てできる環境作りを支援していく必要がある。 ・子育て家庭を見守る地域全体の雰囲気づくりを進められるよう、地域や世代を超えたより一層の取り組みを進めていく必要がある。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		A	A
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		B	B
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

はっちボランティア活動実績			夏休み中学生1dayボランティア			プレママ・プレパパ利用		
	登録人数	活動数		実施日数	参加人数		プレママ	プレパパ
H30年度	31	85	H30年度	18	10	H30年度	119	64
R3年度	40	122	R3年度	緊急事態宣言中のため中止		R3年度	149	118
R4年度	46	142	R4年度	10	34	R4年度	191	154
R5年度	45	208	R5年度	10	47	R5年度	247	180

1 地域の子育て支援者を支える

- ・地域で子育てひろば・サロンを運営している方たちで子育て支援の活動内容や課題を共有する場を設けた。また、要望があった時は、子育てひろば・サロンへ出向き、困り事やその地域情報の共有も行った。
- ・地域の子育て支援にかかわる方へ向け、港南区子育て連絡会と共催で父親支援や児童相談所の役割など子育て支援活動に役立つ研修会を実施し多くの方と共通の知識を得ることができた。
- ・子育てグループ交流会のリーダー研修会について、区と子育て支援者と協力して、活動の課題を把握し解決策について考え実施した。
- ・子育てグループの紹介をひろば内で掲示し新メンバー募集の協力を行うことや、はっちの公園あそびでは、その地域の子育てグループも招待し参加者をつなげる援助を行った。
- ・コロナ禍には区内のケアプラザより子育て家庭が集まる部屋の感染対策について拠点の取り組みを聞かれアドバイスした。

2 子育て支援活動の場を増やす

- ・はっちボランティアとして登録している方たちに、毎月案内を送付することによりひろばでの見守り、背守り刺繍ガーゼハンカチの製作、広場内装飾の提案と製作、講座準備と開催時の見守りなど活動の場が増えた。
- ・地域で活動をしていきたい読み聞かせのグループが地域で活動できるよう働きかけを行った。

3 子育て家庭を見守る大切さを知ってもらう

- ・主任児童委員、こんにちは赤ちゃん訪問員など地域で子育て支援に関わる方たちの定例会で妊娠期の支援について説明を行った。
- ・芹が谷地区支えあいネットワーク会議で子育て研修会講師として参加し子育ての現状を話し地域での見守りについて考えてもらった。
- ・下永谷地区社協の定例会を拠点で実施し、拠点を見てもらうことで子育て家庭の現状や拠点の役割を知ってもらえた。

4 子育て世代と触れ合う次世代育成の取り組み

- ・短大生・看護学生の実習や中学生の職業体験を受け入れ、ひろばが親子とのふれあいの場となった。
- ・区内の全中学校に、夏休み中学生1dayボランティア体験を周知し区内全域から申込があった。また、拠点内のお祭りイベントにも参加してくれた中学生もいて、通常の広場とは違う親子の関りを学んでもらえた。
- ・毎月、妊娠期の方たちが来館しやすいイベントを実施している事で、子育て家庭と交流しやすい場となった。

評価の理由(区)

- ・地域の子育てひろば・サロンなどの地域や関係機関に拠点の機能が周知できるよう調整し、子育て支援者との連携やスキルアップのための交流会・勉強会の在り方についてともに検討した。
- ・既存の子育てグループが継続できるように拠点とともに支援した。
- ・「中学生ボランティア」を広く周知するために校長会で依頼できるように調整した。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・はっちボランティアとして登録している方が、拠点内・外と活動できた事で、色々な場面で活動してもらえ事が増えた。
- ・夏休み中学生1dayボランティア体験の周知を近隣の中学校から区内全ての中学校を対象にした事で、参加者が増えた。
- ・プレパパ・ママ向け事業や区の母子保健コーディネータと連携することでプレパパママ利用者が増え拠点の利用者と触れ合う機会が増えた。

(課題)

- ・多様なグループ活動や子育て家庭の仲間づくりを継続できるよう引き続き支援を行っていく。
- ・港南区の養育者の現状を把握し、それを踏まえたうえでの取り組みをさらに周知・共有していく。
- ・拠点の活動で育った人材を地域につなげていく。

振り返りの視点

- ア 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- イ 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- ウ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- エ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- オ 活動希望を丁寧を受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- カ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- キ 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ク これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	<ul style="list-style-type: none"> ・多様化している養育者のニーズに対応できるよう、様々な取り組みをさらに検討していく必要がある。 ・利用会員を適切な支援に繋げるため、引き続き丁寧なニーズ把握に努めていく必要がある。 ・提供会員・両方会員の拡大に向けて、新たに小学校高学年保護者に向けて配布するための工夫が必要である。 ・専門的な対応が必要と思われる利用会員家庭に対して、提供会員がコーディネーターに相談しやすい環境と、各関係機関と連携できる仕組みづくりを構築していく必要がある。 	A	A
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		A	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	A
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

	全会員数 (人)	会員数内訳(人)		入会説明会(回数/参加人数)								活動件数 (人)	親子の居場所における活動件数	コーディネート件数						
		利用会員	提供会員	両方会員	集団				個別					相談数	キャンセル数	調整数	コーディネート数			
					拠点内(平日)	拠点内(土曜)	出張	拠点内	出張											
H31(2019)年度	705	559	113	33	13	108	12	135	6	25	25	26	2	2	2319	44	188	36	542	195
R2(2020)年度	680	547	109	24	15	55	9	29	11	26	56	59	3	3	1547	47	137	18	322	132
R3(2021)年度	720	590	107	23	13	36	10	70	18	27	55	66	11	11	1913	54	208	52	638	190
R4(2022)年度	822	678	120	24	12	57	11	69	22	59	70	78	9	10	1594	29	187	28	583	182
R5(2023)年度	935	791	118	26	11	82	13	128	27	79	61	74	17	22	2622	172	312	58	836	293

1 妊娠期からの周知

- ・区の協力を得て、区報・母子手帳交付時・両親教室・赤ちゃん教室・こんにちは赤ちゃん訪問・4ヶ月健診等で「子サポde預かりおためし券」の周知や利用促進に努めた。
- ・拠点事業の沐浴体験・ブレマブレパパパチ体験で妊娠期の方への周知を行い、妊婦の入会説明会への参加者が増えた。産後すぐ(0歳児)の登録が増えた。
- ・子育て連絡会を通じて、子育て支援に関わる団体60カ所にチラシの配布の協力を得、より多くの区民への周知になった。
- ・拠点における集団での入会説明会は平日と土曜日の開催を続けたことで、平日の参加が難しい方の参加や男性のみや家族での参加が増え900名を超える会員数となった。
- ・集団での入会説明会は、親子のつどいのひろば・地域ケアプラザ・地区センターでも開催し、拠点から遠い地域の方にも参加しやすいように会場や回数を増やし、前年度より参加者を増やした。

2 養育者のニーズに応える支援

- ・ひろばスタッフ・子育てパートナーと連携し、両方で丁寧な聞き取りを行ない、「24時間型緊急保育」や「一時保育」「乳幼児預かり事業」などの親子にとって必要な支援につなげることができた。
- ・子サポの預かりを拠点で行う際には、ひろばを利用中の保護者に子育てサポートシステムの預かり中であることを説明した。活動中の様子をひろば利用者が見ることで、新たな利用につながった。R5年度はコロナ前を大幅に上回る172回の利用となった。
- ・専門的な対応が必要と思われる利用会員家庭に対して、児の交通事故後の登校支援の依頼には子育てタクシーを、保育園児の降園後の預かりには保育園の延長保育を、重度の障がい児にはガイドヘルパーを、関係機関と調整しながら、保護者や家庭の状況に応じてつなげることができた。
- ・リフレッシュ利用促進のための講座を行うことで、利用を躊躇していた会員の利用のきっかけとなった。
- ・拠点での個別対応や家庭への訪問も積極的に行った(R5年度17回)ことで、会員数が900名を超えた。それに伴い依頼やひろばの活動件数が増えた。
- ・「子サポde預かりおためし券(無料クーポン)」の周知に努め、紙クーポンの発行は86件うち約3割が利用に至った。

3 提供会員獲得に向けた取り組み

- ・エリア別で絞った提供会員募集チラシは、非常に反応が良くピンポイントで提供会員を増やすことができた。
- ・中学校では全校生徒の保護者に向けてチラシを配布したことで、若い保護者や祖父母世代に届き問い合わせが増え登録に至った。
- ・提供会員予定者研修会は就労家庭が参加しやすい日曜日に開催した。18区の内港南区のみの取り組みであり提供会員が増えた。

4 提供会員の活動継続に向けた取り組み

- ・活動報告書を丁寧に確認し、提供会員に連絡を取り、円滑な活動が送れるように配慮した。こまめな連絡で信頼関係を築いたことで、子サポの活動の大切さを感じて活動していただいている。
- ・拠点ひろばでの活動時には、コーディネーターが提供会員と積極的にコミュニケーションを取り、心理的負担を軽減させることで、拠点での預かりを希望する提供会員や利用会員が増えた。
- ・「援助の報酬(利用料)の改定に伴う提供・両方会員向けの給付金の支払い、子サポdeあずかりおためし券(無料クーポン)の配付」や「新システムでの更新手続き」は、説明会を平日に加え日曜日にも実施して就労中の会員の参加につなげた。
- ・5年に1度の受講が必須となった緊急救命講習は、対象者にはがきや電話で連絡を取り、未受講者減少につながった。
- ・「個人情報の取り扱いについて」、R5年度に改めて注意喚起を行い、提供会員・両方会員へ保管ファイルを新たに作製し配布したことで、個人情報の取り扱いについて再認識された。

評価の理由(区)

- ・妊娠期からの周知を促すために、母子手帳交付時や両親教室等、妊娠期の事業の機会を利用し紹介をした。
- ・乳幼児健診や赤ちゃん教室、訪問等あらゆる機会をとらえて周知を実施した。
- ・校長会等通して、学齢期の保護者にむけて、提供会員拡大のための周知ができるよう実施した。
- ・子サポが必要なケースを拠点と一緒に同行する等丁寧に繋げ、サービスを受けられるように調整した。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・妊娠期からの取組、エリア別の周知等、様々な工夫によって会員数やコーディネーター数の増加、居場所での子サポ利用に繋がった。
- ・専門的なかわりが必要な家庭には、細やかな聞き取りにより、養育者のニーズに応え区役所や関係機関へ適切につなぐことができた。
- ・コーディネーターの提供会員への細やかな対応により、提供会員が安心して活動を行うことができ、利用会員にサービス提供をすることができた。

(課題)

- ・提供会員の質的向上として、提供会員のニーズを細やかにひろい、ヒヤリハットの共有等話し合う機会を設け、区役所での研修等への参加を促す。
- ・提供会員・両方会員拡大に向けて、ターゲット層でもある自治会・町内会へのアプローチを協力して実施していく必要がある。
- ・新システム導入に伴い提供会員の減少に繋がらないように、より丁寧なフォローや工夫が必要である。
- ・子サポに繋がらなかった世帯に対しては、拠点と区とともに情報を共有しながら、どのように支援をしていくか検討していく。

振り返りの視点

- ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
- イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
- ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。
- エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネーターができているか。
- オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。
- カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。
- キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。
- ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
- ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか(新たな事業の実施や事業の見直しなど)
- コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。
- サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考) 3期目振り返りの課題	自己評価 (A~D)																																																
		法人	区																																															
① 拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	<ul style="list-style-type: none"> ・さらに認知度を上げるため、拠点・区とともに周知を工夫していく必要がある。 ・利用者支援事業としての相談機能の更なる強化や必要な時に必要な支援に繋いでいくために拠点全体で仕組みづくりを充実させていく必要がある。 ・妊娠期の事業から見えてくる、妊娠期家庭のニーズ把握により一層努めていくことで、新たな事業展開や区との連携等についてつなげていく必要がある。 ・妊娠期からの切れ目のないアプローチについて、母子保健コーディネーター等と連携した取り組みが必要。 ・拠点を利用していない親子とつながるために、アウトリーチ方法を考えていく必要がある。 	B	A																																															
② 相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。		A	A																																															
③ 子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。		B	A																																															
評価の理由(法人)																																																		
(主なデータ)		【相談件数と相談内容】																																																
【横浜子育てパートナー認知度】		—																																																
<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>拠点実施</th> <th>区乳幼児健診</th> <th>支援者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H30年度</td> <td>56%</td> <td>27%</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>R5年度</td> <td>46%</td> <td>49%</td> <td>66%</td> </tr> </tbody> </table>		拠点実施	区乳幼児健診	支援者	H30年度	56%	27%	—	R5年度	46%	49%	66%	<table border="1"> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>件数</th> <th>就園・就学</th> <th>親自身</th> <th>子どもの発達</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H30年度</td> <td>414件</td> <td>21%</td> <td>20%</td> <td>16%</td> </tr> <tr> <td>R1年度</td> <td>404件</td> <td>22%</td> <td>17%</td> <td>16%</td> </tr> <tr> <td>R2年度</td> <td>332件</td> <td>56%</td> <td>43%</td> <td>22%</td> </tr> <tr> <td>R3年度</td> <td>414件</td> <td>29%</td> <td>18%</td> <td>14%</td> </tr> <tr> <td>R4年度</td> <td>380件</td> <td>30%</td> <td>25%</td> <td>8%</td> </tr> <tr> <td>R5年度</td> <td>315件</td> <td>33%</td> <td>22%</td> <td>10%</td> </tr> </tbody> </table>			年度	件数	就園・就学	親自身	子どもの発達	H30年度	414件	21%	20%	16%	R1年度	404件	22%	17%	16%	R2年度	332件	56%	43%	22%	R3年度	414件	29%	18%	14%	R4年度	380件	30%	25%	8%	R5年度	315件	33%	22%	10%
	拠点実施	区乳幼児健診	支援者																																															
H30年度	56%	27%	—																																															
R5年度	46%	49%	66%																																															
年度	件数	就園・就学	親自身	子どもの発達																																														
H30年度	414件	21%	20%	16%																																														
R1年度	404件	22%	17%	16%																																														
R2年度	332件	56%	43%	22%																																														
R3年度	414件	29%	18%	14%																																														
R4年度	380件	30%	25%	8%																																														
R5年度	315件	33%	22%	10%																																														
<p>【区民への出張周知活動】 R5年度23回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・区両親教室、区・拠点ワーキングママパパ両親教室 ・港南区子育て連絡会全体会、推進委員会、エリア会議、港南台子育て連絡会、子育て支援者会議 <p>【出張相談場所】 R4年度 36か所 R5年度40か所</p> <p>親と子のつどいの広場、あつぷぷ、港南台子育て連絡会七夕まつり、主任児童委員の子育てサロン</p>																																																		
<p>1 区民への周知活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・区民まつりと親と子のつどいの広場や子育てひろばにも協力を得て、子育てパートナーの専用ダイアル記載のウェットティッシュ(800個)を配布して周知を行った。 ・年末には卓上カレンダー(250個)を利用者支援周知のため利用者および子育て支援関係者に配布した。 ・港南区子育て連絡会・港南台子育て連絡会・虐待問題連絡会など当事者だけでなく子育てに関わる支援者の会議に出席し、利用者支援の機能を伝えた。 <p>2 利用者支援事業としての相談機能の更なる強化や拠点全体の仕組みづくりについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相談者の主体性を尊重し、毎回相談者の気持ちに寄り添う相談を心がけた。 ・相談者が拠点ひろばや相談室を選択でき、母が泣き出したり、子どもから離れたい希望があった場合はひろばスタッフが子を見守る体制を整え、連携して相談対応した。 ・必要に応じて日々の反省会でひろば職員と情報共有し、役割分担や次回対応について打ち合わせた。 ・心配な親子について区と共有するタイミングは施設長と検討をしながら判断し、毎月区と丁寧なカンファレンスを実施した。 ・区からの要請で関係機関とのケースカンファに出席し、要保護家庭を各施設と連携して見守る体制に協力した。 <p>3 妊娠期の事業について新たな事業展開や区・母子保健コーディネーターとの連携した取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沐浴体験落選者や日程が合わない家庭にも個別対応を行うことで、拠点利用のきっかけとなり産後の利用につながった。 ・妊娠期家庭のニーズの高い「沐浴体験」や※「赤ちゃんとの生活プチ体験」の運営に産前に顔の見える関係を構築するため積極的に関わった。 ・参加者の声から「プレママおしゃべり会」が生まれ、出産後に拠点を安心して利用でき、妊娠期からの仲間づくりも進むよう対応した。 ・妊娠期からの切れ目のない支援を目的に、区の母子保健コーディネーターと連携して、働きながら妊娠期を過ごし、両親教室の参加が難しい方を対象に※「港南区にお住いのワーキングママ・パパのための両親教室」(会場は区と拠点で2回ずつ計4回)を開催し拠点を知らせてもらった。 <p>4 拠点を利用していない親子とつながるためのアウトリーチおよび地域資源の開拓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・港南区子育て連絡会、港南台子育て連絡会を起点に地域の方とつながり、親子へ周知依頼をした。 ・港南台子育て連絡会主催の※港南台パズでの「七夕まつり」では会場内の子育て相談コーナーを担当し、区保健師や地域の子育て支援関係者と相談対応や地域資源の紹介をした。 ・主任児童委員主催の「おやこコンサート」では運営サポートに参加し、参加した親子に拠点の周知を行うとともに、主任児童委員と顔の見える関係づくりを進めた。 ・公務員住宅跡地エリアで港南中央地域ケアプラザのコーディネーターと親子の居場所づくりを企画し、※日野サザンポートを会場に開催した。地域の仲間づくりの支援を行うなか、町内会立ち上げの課題などコーディネーターと話すことができた。 ・港南区社協とフードバンク横浜共催の「フードバンク」を見学し、実施方法や支援できる家庭について知ることができた。 ・港南区子育て連絡会のエリア会議、虐待予防のオレンジ会議に、学校関係者など新たな関係機関とのネットワーク構築を進めるために出席した。 ・コロナ禍でも子育て支援者が開催している子育てひろばに出向き、ひろばの様子などを情報収集し、支援者との顔の見える関係づくりを進めた。 ・虐待問題連絡会に参加し、区内の状況を知り、子育て支援関係機関との連携の機会となった。 ・地区の状況に応じて子育て支援状況について区と関係機関との会議に出席し、出生状況や地域の課題について共有し、今後の支援策について協議した。 																																																		

区の評価

- ・区の事業の機会をとらえて、利用者支援事業の説明および周知の機会を設けた。
- ・利用者支援事業のカンファレンスでは、相談の全数を一緒に共有検討し、パートナーが適切な時期に適切な機関に繋がれるように調整、助言を実施した。
- ・妊娠期からの切れ目ない支援の実施のために母子保健コーディネーターとも一緒に事業を計画・実施できるよう調整した。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・様々な事業や機会をとらえ、利用者支援事業の周知をした結果、子育てパートナーの認知度が向上した。
- ・横浜市版子育て支援包括支援センター推進のため母子保健コーディネーターと連携し妊娠前から拠点を知り、出産後スムーズに利用につながる流れが確立できた。
- ・ひろば相談と利用者支援の役割分担が日々整えられたとともに、ケースによっては子サポ事業も絡めながら拠点全体で利用者支援事業を進めることができた。

(課題)

- ・アウトリーチ活動を通じて支援の届きにくい地域へ足を運び、子育て支援者や関係機関と情報共有して地域の課題解決に向けて話し合う必要がある。
- ・適切な時期に適切に相談を繋いでいくことをさらに向上させていくためにも、関係機関の役割や業務について知識を深め、連携していく必要がある。

【文言説明】

※「赤ちゃんとの生活プチ体験」: 赤ちゃん人形を使用し、これから始まる生活をイメージできるイベント。赤ちゃんのお世話体験や夫婦のパートナーシップについて話す時間を作った。

※「港南区にお住いのワーキングママ・パパのための両親教室」: 区両親教室の課題から、就労している家庭向けの両親教室

※「港南台バース」: JR港南台駅前ショッピング複合施設

※「日野サザンポート」: 日野地区にある特別養護老人ホーム

振り返りの視点

ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。

イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。

ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。

エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。

オ 拠点内でパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつなぐ必要性を判断し、対応しているか。

カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。

キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。

ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。

ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。

コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。

サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。